

中央学院大学における第二外国語教育の
現状と問題点
——ドイツ語教育を中心に——

内村国臣

- <目次> 1 はじめに
2 第二外国語教育の現状
3 ドイツ語教育の現状と問題点
4 「教育改革」と外国語教育

1 はじめに

平成3年7月の大学設置基準の改正，すなわち設置基準の大幅な規制緩和，大綱化は，各大学にその建学の理念・目的に基づき，学術の発展や社会の要請に適切に対応し，特色あるカリキュラムを編成して，より魅力ある活力に溢れた大学づくりの機会を与えるものであった。同時に，大綱化は，大学に対して「教育研究水準の向上」「大学の目的及び社会的使命」の達成のため，教育研究活動の自己点検・評価を不断に努めるべきものとした。この「自己点検・評価」の努力義務の登場の背景には，「大学のなかで行なわれている教育・研究という営みの意義，効果，生産性といったものに対する漠然とではあるが根深い不信，ないしは疑問といったもの」「もっと本質的にいえば，現代社会における大学という社会制度のはたす役割や機能に対する根源的な問い直しの動き⁽¹⁾」があると思われる。

今，大学は新制大学発足以来の大改革期にある。すでにカリキュラム改革を実施，または来年度以降に予定している大学は，国公立あわせて223大学(全大学の43%)，検討中の大学も214校ある。また，数年前は2，3の大学でしか見られなかったシラバス(年間授業計画による履修指導)を作成しているところが80校に達する⁽²⁾という報告もある。8割近くの大学が自己点検・評価の体制を作り，国立大を中心に約60の大学が点検結果を公表している。本学でも，遅ればせながら平成5年度になってようやく組織的に「大綱化」を検討する委員会が設置され，カリキュラムの改革に取り組み始めた。

もとより，大学における自己点検・評価も，「各教員が(研究だけでなく)教育の重要性を認識し，不断に教育内容・教授方法の改善に努めること⁽⁴⁾」なくして，その実効性を高めることはできない。そのためには，「授業の目標に対する到達度を筆記試験を行なって確かめるだけでなく，学生による評価によって学生のニーズをつかみ，授業内容や方法を改善すること⁽⁵⁾」も一つの手段であろう。

本学の語学教育環境は，理想からは程遠いものである。本稿は，本学における第二外国語教育の現状をドイツ語教育の現場を中心に過去数年間にわたって

調査・分析し、明らかとなった問題点にいかに対応してきたかの報告であり、同時に問題点の明示、改善策を提起するものである。

2 第二外国語教育の現状

(1) カリキュラムにおける外国語科目の位置

本学においては、商学部、法学部ともに、現在、英語を第一外国語とし英語 I, II, III, IV (各2単位) を必修とし、I, II は1年次に、III, IV は2年次にそれぞれ配当されている。また、V, VI (各2単位) が、選択科目として3, 4年次に配当されている。第二外国語としては、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語が設けられているが、

『2. 第一外国語「英語 V, VI」・第二外国語の中から1科目(4単位)を選択し、履修しなければならない。

3. 第二外国語の「I」を修得した場合は次年度以降に原則として同一科目同一担当者の「II」を修得しなければならない。「I」が不合格となった場合、同一科目につき次年度に「I」, 「II」同時に履修することができる。』

(商学部、法学部「学生要覧」p.16)

第3項の「原則として」は1989年度に、後段の「I」, 「II」同時履修についての規定は1988年度に付け加えられた。前者の改正は、規定にもかかわらず不修得の場合次年度に他の外国語への乗り換えが履修現場では実際に認められていたこと、「原則として」を加えることによって学生の時間割作成を容易にすることを配慮したものである。後段は、「乗り換え」を抑止することを狙ったものであるが、ことドイツ語に関しては「同時履修」の学生はそれほど多くはない。

授業は、週一回90分である。

なお、英語 V, VI の履修については、配当年次が3, 4年次であるため第二外国語を修得できなかった学生や第二外国語の履修を全く望まなかった学生が履修する場合が多く、第二外国語の履修生よりもその数は少ない。ちなみに、ロシア語は、現在は休講科目となっている。

(2) 学生が履修を第一志望とした外国語 I (表 1)

	中国語	独 語	仏 語	西 語	露 語	英 V, VI	総 数
1992年度 (%)	1060 (70.2)	296 (19.6)	124 (8.2)	31 (2.9)	0 (0)	12 (0.8)	1511
1993年度 (%)	1089 (62.4)	345 (19.8)	248 (14.2)	56 (3.2)	1 (0.06)	2 (0.1)	1745

※この数値は、新年度の初めに行なわれる第二外国語志望調査の結果に基づき算出した。これには、再履修生、編入生の数も含まれている。また、履修届け提出期限後出されたものや時間割り上変更・修正を余儀なくされたものについては含まれていないので、最終結果の数値とは若干の差異がある。

1992年度と1993年度を比較して、ドイツ語、スペイン語が微増であったのに対して、中国語が7.8%減、フランス語が6%増となっている。学生の履修態度(動機)については後に言及するが、時間割作成上の都合といった要素もあり、単純に「当該外国語を学びたい」からとは解されない。

(3) 第二外国語 I の履修状況 (表 2)

	中国語	独 語	仏 語	西 語	露 語	英語 V, VI	総 数
1992年度 (%)	697 (45.5)	415 (27.5)	287 (18.7)	112 (7.4)	0 (0)	11 (0.9)	1523
1993年度 (%)	937 (53.7)	428 (24.5)	302 (17.3)	78 (4.5)	0 (0)	0 (0)	1745

※この数値は、志望調査表に基づき算出した。これには、再履修生、編入生の数も含まれている。また、履修届け提出期限後の提出や時間割上の変更・修正は含まれていないので、最終数値とは若干異なる。なお、1992年度に第二外国語志望調査表で何れの外国語に履修決定したのか定かでない不明者が9名存在していたが、その数字は総数に含まれていない。

志望者の数字と履修生の数が異なるのは、学生の志望を尊重しつつも実際には教室の規模とか教員の数等の他の要素も加味して、教務課が最終的に決定している。その結果、中国語を第一履修外国語として志望した学生の一定の者が他の外国語に振り分けられていることになる。

(4) 各外国語 I 履修生の第一志望外国語の内訳 (表 3)

外国語	中国語		独 語		仏 語		西 語		英 V, VI	
	1992	1993	1992	1993	1992	1993	1992	1993	1992	1993
履修者	697	937	415	428	287	302	112	78	11	0
第一志望										
中国語	697	937	154	80	133	52	76	20	0	0
(%)	(100)	(100)	(37.1)	(18.7)	(46.3)	(17.2)	(67.9)	(25.6)		
独 語	0	0	261	345	29	0	6	1	0	0
(%)			(62.9)	(80.6)	(10.1)		(5.4)	(1.3)		
仏 語	0	0	0	2	124	248	0	1	0	0
(%)				(0.5)	(43.2)	(82.1)		(1.3)		
西 語	0	0	0	0	1	0	30	56	0	0
(%)					(0.3)		(26.8)	(71.8)		
露 語	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
(%)						(0.3)				
英 V, VI	0	0	0	1	1	1	0	0	11	0
(%)				(0.2)	(0.3)	(0.3)			(100)	

この表の数字からも明らかなように、中国語履修生全部が中国語を履修第一志望外国語にした学生たちである。中国語を第一志望としながらも他の外国語へ振り分けられた学生が、1992年度で34.2%、1993年度で14%となっており、志望動機との関連については後述するが、ここではある程度学習意欲に影響を与えるものであることだけを指摘しておきたい。

(5) 再履修外国語 I として学生が履修を第一志望とした外国語 (表 4)

再履修外国語	中 国 語		独 語		仏 語		西 語	
年 度	1992	1993	1992	1993	1992	1993	1992	1993
再履修者数	247	372	43	64	34	56	47	15
第一志望								
中国語	247	372	9	15	18	27	45	3
独 語	0	0	34	36	0	0	0	0
仏 語	0	0	0	1	15	29	0	0
西 語	0	0	0	0	1	0	2	12

※この数字には、編入生の数も含まれる。

(6) 外国語 I の学年別再履修状況 (表 5)

再履修外国語	中国語		独 語		仏 語		西 語	
	1992	1993	1992	1993	1992	1993	1992	1993
総 数	247	372	43	64	34	56	47	15
2 年 生	223	244	27	45	24	42	47	7
3 年 生	16	120	11	15	10	13	0	6
4 年 生	8	8	5	4	0	0	0	2

※この数字には、編入生の数も含まれる。

再履修の志望調査の場合も、正規の履修志望調査同様、志望を基に教室の収容能力や教員数等の要素を考慮して、教務課が決定している。再履修での志望動機は、かなり確たるものがあるので、第一志望が叶わなかった場合、正規の履修の場合と比べてその学習意欲に及ぼす影響たるやかなり大きいと言わざるをえない。

なお、中国語 I を再履修することを志望し、実際に再履修する学生が多いのは、中国語 I の修得が難しいとか、修得できなかった学生が多いことを意味するものではない。

(7) 第二外国語 I の一クラスの規模 (表 6)

年 度	クラス数		最高規模		最低規模		平 均	
	1992	1993	1992	1993	1992	1993	1992	1993
中国語	7	9	104	115	94	92	99	105
独 語	5	7	96	85	65	28	83	62
仏 語	4	6	94	78	47	26	73	50
西 語	1	1	112	78	112	78	112	78

※この数字には、再履修生、編入生の数も含まれる。

1993年度を例にとると、中国語の場合、9クラスある中で1クラスのみが92名で、その他は全て100名以上である。ドイツ語においては、最高の85名を筆頭に83, 77, 63, 62, 39, 28の規模である。フランス語では、最高の78名を筆頭に59, 54, 42, 40, 26といった規模となっており、中国語はもとよりドイツ語よりもはるかに教育環境は恵まれているといえよう。クラスの規模は、授業内

容・形態に大きな影響を与えるものである。中国語の置かれた教育環境は、ドイツ語、フランス語、スペイン語と比較して、語学教育の場としては「きわめて劣悪」で、教授方法の開発や工夫にも限度があり、自ら授業の到達目標もありうべき姿からは程遠いものにならざるをえないだろう。本学における第二外国語の教育現場は、クラスの規模の点だけでも、ドイツ語、スペイン語そしてフランス語も含めて、「理想的」な教育環境からは程遠い状況にある。

3 ドイツ語教育の現状と問題点

現在、本学でのドイツ語のクラス数は、ドイツ語Ⅰが6クラス、ドイツ語Ⅱが5クラスである。専任講師（1名）がⅠを4クラス、Ⅱを3クラス担当し、残りのクラスを非常勤講師2名が担当している。ここに、提示する資料はすべて専任講師（内村）担当のクラスに関するものである。1992年度の授業の始めに、学生に第一志望外国語、志望動機、ドイツ語の授業に何を望むかについて自由に書いてもらい（以下「1992年調査」）、1993年度始めに、(1)履修志望外国語、(2)志望動機、(3)ドイツ語授業に何を期待するか、(4)ドイツは好きか、(5)ドイツについて知っていることを書きなさい。といった質問に回答してもらった（以下「1993年調査」）。さらに、1993年度前期終了時に(1)教室での座る位置、(2)授業の興味度、(3)理解度、(4)ドイツ語を履修したことを良かったと思っているか否か、(5)不合格者を対象に補講期間に補習を行ない、最後に試験をやることについての賛否、(6)不合格となった場合、補習を受講するか否か、について調査した（以下「1993年前期調査」）。

(1) 志望の動機

本学では、現在、学生の6～7割が中国語の履修を第一志望としている。ドイツ語志望者は、ほぼ2割というところである（表1）。ドイツ語履修生の中には、1992年度で3割強、1993年度で2割弱が中国語を第一志望としたが、第二～第四志望の外国語であったドイツ語に振り分けられた学生もいる。1993年調査では、回答者（222名）中第一志望が、ドイツ語の学生は178名（80.2%）、中国

語が41名 (18.9%)、フランス語が3名 (1.4%) であった。それぞれ第一志望とした動機は、次のとおりである。

- | | |
|-----------------|-------------|
| a. その国に興味があるから | 133 (66.8%) |
| b. 将来仕事に役立てたいから | 41 (20.6%) |
| c. 単位が取りやすいから | 25 (12.6%) |
| 無回答と再履修生 | 22 |

※この数字には、一部複数回答が含まれている。

まず、6割以上を占める「その国への興味」が志望動機となっていることについては、その国について何らかの知識があることが前提になっている。

「ドイツについて知っていることを書きなさい」

ヒトラー	76	首都ベルリン	16
ドイツ統一	70	東西ドイツの分裂	9
ベルリンの壁 (崩壊)	61	ベートーベン	8
車 (Benz, BMW, VW, Audi ほか)	60	三国同盟	8
ビールの本場	45	コール首相	8
ナチス (ネオナチ)	37	その他	
ソーセージ	34		
サッカー王国	28		

ヒトラーが最多であったことは、現在のドイツにとっては不幸なことであるが、彼の犯した人類に対する歴史上最大の犯罪は、「世界史」や「現代社会」の教科や小説、映画「アンネの日記」、第二次世界大戦のドキュメンタリーフィルムなどを通して強烈に脳裏に焼き付いているようだ。二番目に最多の「ドイツ統一」は、「ベルリンの壁 (崩壊)」「首都ベルリン」「東西ドイツの分裂」と関連するキーワードで、総合すると「ヒトラー」より強いインパクトを与えているようである。「ドイツ統一」については、1992年調査でも学生が挙げていた最多の理由であった。「天安門事件」が起きた年以降全国の大学で中国語の履修生が減少したとのことであったが、マスコミでの話題がある程度「増減」に影響する。しかし、マスコミに影響を受ける学生は、新聞、テレビのニュース、週刊誌、週刊誌の社内広告等、または学校の先生、友人、家人を介して知りえた

わけで、政治にある程度関心があったものと考えられる。

それ以外の学生では、志望の「動機づけ」に影響を与えた要因には「人」と「情報」が挙げられる。「人」では、父親、高校の先生、高校の先輩と同級生、本学の先輩などである。「父親」の場合、父が「大学時代ドイツ語を取っていた」「ドイツ(人)を相手に仕事をしている」「ドイツ人が家に来ることがある」などである。「高校の先生」では、「尊敬する先生が大学時代ドイツ語を履修していた」「先生がドイツに行ったことがある」や「予備校の時先生や兄に勧められた」などである。なかには、本学の教師に「中国語が一番人気で、次にドイツ語だと言われたので、一番人気では人が多いだろうと思って……」「法学を専攻するのならドイツ語を」と勧められた学生もいる。もちろん、法学部の学生で「法学を学ぶのうえで必要」と書いた学生も少なくなかった。「友人」や本学の「先輩」の情報には矛盾するものがあり、興味深い。

「オリエンテーションの時に先輩(補助学生)からドイツ語は単位を取るの
が難しいと言われ、第四志望にした」

「中国語が一番楽と聞いて」

「ドイツ語は選択の中で一番簡単だと友人から聞いた」

「大学に入ったらドイツ語が一番いいよとあらゆる人が言った」

「情報」については、実に様々で、「情報」を発する人の質とそれを受信する人の質が問われていると思われる。

「発音が英語に似ている」

「発音が日本語に似ている」

「英語が分かれば上達もはやい」

「ローマ字読みで自分にも出来ると思った」

「文法が英語と殆ど同じ」

「文法が英語と似ている」

「フランス語などより理解しやすい(学びやすい)」

その他、志望動機としては、「将来仕事で使いそう」「仕事に役立ちそう」「東西ドイツの統一により将来世界に大きな影響を与える国」「経済大国の経済や法律を少しでも理解したかった」「他の外国語よりも興味があった」「高校時代

に音楽の時間にドイツ語で歌ったことがある」「ドイツの文化などに興味」「ドイツという国が好き」「ドイツに行ってみたい」「サッカーを見に行きたい」などがある。

第二外国語の志望、選択、履修については、「志望調査表」を見ると、もちろん第一志望から第四志望まで同じ外国語のものも多数あるが、三つないし四つ異なる外国語を書いている学生も多いことに象徴されるように、それほど一つの外国語に拘泥せず、自分の「時間割」を作成するうえでの「都合」といった理由も結構大きな比重を持っているようである。他には、「講義要項を読んで」「講義要項に出席点、平常点重視と書いてあったから」という動機もある。

前述の「単位が取りやすいと聞いたから」(25名)と回答した学生のうち、14名が中国語を第一志望としており、11名がドイツ語を第一志望とする学生で、中国語志望者のほうが多かった。この点については、後で再度言及することにする。

(2) 学生の授業到達目標

学生は、一体ドイツ語の授業に何を期待しているのか(1993年調査)。

ドイツ語が読めるようになりたい	90 (36.4%)
ドイツ語が話せるようになりたい	73 (29.6%)
ドイツ文化を知りたい	56 (22.7%)
とにかく単位が取ればよい	28 (11.3%)
無回答	7 (3.2%)

※複数回答者の回答も含む。

1992年調査では、「ドイツに旅行しても恥ずかしくない知識と会話能力を身につける」ことを期待している学生もいる。

(3) 学生の授業に対する要望

現代の学生が「望ましい」と考えているのは、「10分遅れて始め、15分おきに講義と関係ない面白い話を入れて、そして10分前に終る」教師であり、講義であるということである。

アンケート調査を行なった授業は、ドイツ語 I (初級文法) である。学生の多くが当然ながら「面白い授業」を望み、学生の要望をトータルすると「初学」なので「基礎から丁寧に、分かり易く」説明し、「ドイツの歌」や「ゲーム」を使って「自然に覚えられる」ようにし、授業の間に時々「ドイツの有名入」「幅広くドイツの情勢等」「ドイツの風習」「料理」「歴史」についての話を交えながら「日常会話」力が身につくようにする。そして、願わくば、「宿題を少なく」「出席点、平常点を重視」し、「テストを易しく」する。しかし、「休講が多く、成績評価が甘く、明るく楽しい授業」は、入る場所を間違えた要望であろう。

〈授業は面白いか〉(1993年調査)

- | | |
|----------|-------|
| a. 面白い | 13.3% |
| b. 少し面白い | 63.9% |
| c. 面白くない | 22.8% |
| d. 退屈 | 0% |

「初級文法」の授業で、77%が「面白い」「少し面白い」と感じていれば、授業としては「成功している」と評価してもよいのではないか。しかし、「面白くない」(22.8%)と答えた学生(41名)の理解度を調べてみると、

- | | |
|---------------|----|
| a. 十分理解できる | 0 |
| b. 大体理解できる | 15 |
| c. 少ししか理解できない | 26 |

となっており、理解度とかなり深い関係があると言わざるをえない。これらの学生のうち、前期試験の結果は次のとおりであった。

- | | | |
|--------|-----|----|
| b. 回答者 | 合格 | 13 |
| | 不合格 | 2 |
| c. 回答者 | 合格 | 19 |
| | 不合格 | 7 |

不合格者7名の前期の出欠状況を見ると、

- | | | |
|----|-----|---|
| 欠席 | 0 | 1 |
| | 1~2 | 3 |

3～4 4

5以上 1

で、欠席→理解しにくくなる(授業について行けない)→面白くない→欠席→ついて行けない⇒試験に不合格,といったパターンとなっているようである。ちなみに,7名中2名は中国語を第一志望としていた学生である。

「初級文法」の時間に,「文法」と関係のないドイツの「政治・経済情勢」「生活習慣」「歴史」等学生の「面白い」授業に対する要望を取り入れて,ドイツ留学時代の体験やその後のドイツ滞在の体験を色々交えて授業を進めるようにしているが,「15分おきに」そういった話を入れるのはなかなか容易なことではない。

(4) 学生の授業の理解度

学生が,授業に関心を示しているか,どの程度理解しているか,について教師たるものは常に注意をはらい,理解度を把握し,点検・評価し,理解させるにはどのような工夫がなされなければならないか,新たな教授法の研究に努力しなければならない。

〈説明は,理解できるか〉(1993年前期調査)

- | | |
|---------------|-------------|
| a. 十分理解できる | 9 (4.6%) |
| b. 大体理解できる | 111 (56.9%) |
| c. 少ししか理解できない | 75 (38.5%) |

この結果,約6割強の学生が「十分」か「大体」理解していることが分かるが,「少ししか理解できない」と答えた学生が3割以上あったことは,深い反省を要し,新たな教授法の研究,授業の工夫が必要であることを物語っている。

〈「少ししか理解できない」の理由〉(複数回答可)

- | | |
|-------------|----|
| a. 説明が下手 | 3 |
| b. 説明が速すぎる | 38 |
| c. 進度が速い | 42 |
| d. よく聴いていない | 9 |
| e. 自宅で勉強しない | 33 |

f. 欠席して理解できなくなった 3

g. その他 10

まず、「進度が速い」ということについてであるが、ここには教師の考えとギャップが見られる。近年、全国の多くの大学でも一年間で教科書が終了しないといった傾向にあるようで、本学でもドイツ語 I (文法) については、過去終了したことはなく、次年度に回している。前期に扱っている文法項目は、動詞の現在人称変化(1)、名詞・冠詞(類)の単数・複数格変化、動詞の現在人称変化(2)、定動詞(定形)の位置(正置、倒置)、接続詞(1)で、16課ある文法教科書のわずか4課のみである。文法教科書の始めに取り上げてある「発音編」にはあまり時間をかけないようにするか、または完全に飛ばしてしまう。その理由は、(1)文法編に時間をかける、(2)最初に「発音」をまとめてやっても、かけた時間ほど成果は上がらない。したがって、いくつかの日常会話文を皆で復唱し、暗記するように務め、教師の質問に学生が答える、学生同士で質問と解答を繰り返すようにし、そのなかでドイツ語のアルファベットの読み方など発音の練習をする方法をとっている。前期取り上げた会話文は、

Wo wohnen Sie?	→	Ich wohne in Tokyo.
Wohnen Sie in Tokyo?	→	Ja, ich wohne in Tokyo. Nein, ich wohne in Chiba.
Wohnen Sie nicht in Tokyo?	→	Doch, ich wohne in Tokyo. Nein, ich wohne in Chiba.
Was sind Sie?	→	Ich bin Student(in).
Sind Sie Student?	→	Ja, ich bin Student(in).
Wie heißt du?	→	Ich heie Kazushige Nagashima.
Was trinkst du gern?	→	Ich trinke gern Bier(Kaffee, Tee Wein, Saft)

文法的にも非常に重要な動詞 sein, haben を暗記させるためには、次のような形容詞、名詞を用いて、文を作り練習を試みた。

<u>sein</u>			
ich	bin	jung	- alt

du	bist	reich	-	arm
er, sie, es	ist	fleißig	-	faul
wir	sind	groß	-	klein
ihr	seid			
sie(Sie)	sind			

	<u>haben</u>				
ich	habe	Geld		Zeit	
du	hast	wenig	Geld	wenig	Zeit
er, sie, es	hat	viel	Geld	viel	Zeit
wir	haben	kein	Geld	keine	Zeit
ihr	habt				
sie(Sie)	haben				

しかし、教師（質問）→学生（解答）、学生同士（質問→解答）のこの練習も一クラスの学生の数が50名を超えるような教室では、要する時間と効果といった点では、疑問が残る。「覚えておきなさい」と指示して、実際に暗記している学生はそれほど多くない。したがって、前述の会話文は「必ず試験に出す」と宣言し、暗記する「機会」を作るようにした。

「説明が速すぎる」点については、「進度」を無意識に意識して「早口」になっているのかもしれないが、重要な項目については努めて「ゆっくり」と「アクセントをつけて」話すように心掛けているつもりである。また、毎時間始めに前回の復習を行なっている。

(5) 成績の評価基準

外国語、それも初学の外国語を習得するには、とにかく授業に出席し、数多くの練習を重ねなければならない。そのために、学生が授業に出席するように出席点を設け、平常の学習を評価する平常点を設けている。評価方法については、年度の最初の授業でガイダンスの中で履修学生に明らかにし、学生が評価に疑問を抱く余地がないよう、自分で評価できるようにしている。

表 7

年 度	前 期	後 期
1990	(1)前期試験 1 回 (7 月実施) (2)平常点小テスト (3 回) (3)出席点 0 または 8～10点 前期総合評価=(1)+(2)+(3)	(1)後期試験 1 回 (1 月実施) (2)平常点小テスト (3 回) (3)出席点 0 または 8～10点 後期総合評価=(1)+(2)+(3)
	年間総合評価=前期総合評価+後期総合評価÷2 この計算に基づき、50点(本学では50点が合格ライン)を超えているか、後期総合評価のみで50点を超えたものを合格とする。	
1991	(1)前期試験 1 回 (7 月実施) (2)平常点 (小テスト 5 回) (3)出席点 0 または 8～10 前期総合評価=(1)+(2)+(3)	(1)後期試験 1 回 (1 月実施) (2)平常点 (小テスト 4 回) (3)出席点 0 または 8～10 後期総合評価=(1)+(2)+(3)
	年間総合評価 (前年度と同じ基準)	
1992	(1)前期試験 3 回 (合計100点) (2)平常点テスト (最高15点) (3)出席点 0 または 8～10	(1)後期試験 3 回 (合計100点) (2)出席点 0 または 8～10
	年間総合評価 (前年度と同じ)	
1993	(1)前期試験 3 回 (合計100点) (2)平常点テスト (最高15点) (9月に前期総復習テスト) (3)出席点 0 または 8～10 (4)補習+試験	(1)後期試験 3 回 (合計100点) (2)平常点テスト (最高15点) (12月に後期総復習テスト) (3)出席点 0 または 8～10 (4)補習+試験
	年間総合評価 (前年度と同じ基準) 1993年度より各学期不合格者を対象に補講期間に「補習」を行ない、できるだけ学生の「理解度」を高めることに努める。	

※出席点は、無欠席10点、1回欠席9点、2回欠席8点、3回以上欠席0点で各学期ごとに評価する。

上記の評価方法は、1990年度と1991年度においては、小テストの回数に違いが見られるほかは同じであり、1992年度からは各学期3～5回行っていた小テストを廃止して、1992年度は学期中に平常点テスト(1回)を実施し、1993年度は夏休み後の最初の授業で前期終了した範囲について総復習テスト(平常点テスト)を行なった。このように変更してきた意図は、(1)いかに出席させるか、(2)いかに理解度を高めるか、(3)いかに不合格者を少なくするか、にある。そのため、1993年度からは「補習制度」を導入した。この「補習」は、不合格者のみを対象に、それも希望者のみを対象に行なうものである。

〈前期不合格者を対象に、補講期間中に補習授業を4時間程度行ない、最後にテストを行なう〉(1993年前期調査)

賛成 183 (93.8%)

必要なし 12 (6.2%)

〈もし前期不合格の場合、補習授業を受けるか〉

受ける 187 (95.9%)

受けない 8 (4.1%)

7月の補講期間中行なわれた補習授業には出席希望者42人中30人が出席した。3日間(90分×3回)の授業のあと45分の休憩(自習時間)を与え、試験(45分)を行なった。50点満点で25点以上(合格)の学生が、23人であった。もし、試験を授業の後でなく翌日行なっていれば、受講生の試験のための準備時間も、理解度も増し、合格者の数も増えたことであろう。次回の補習からは、2日間(90分×4回)の授業のあと翌日試験を実施することにした。

なお、「補習を行なう」ことについては、学内の同僚より「学生にとっては迷惑なことだ」という意見もあったが、上述の数字が表わしているように「賛成」の学生が圧倒的であったこと、前期合格者のなかにも「補習を受けたい」と希望した学生も少なくなかったことを付記しておきたい。授業の効果を考えて、小人数に限定せざるをえず、合格者で希望する者の意欲をどう受けとめるか今後の課題である。

(6) 年度別履修生数と修得者

表8～9の数字を基に算出すると、1990年度～1992年度では履修生数(年度始めに出席簿に記載された学生数)に対する合格者(単位修得者)の数は、平均61.1%で、不合格者が11.9%、脱落者が26.7%となる。不合格者の一部と脱落者(退学者、除籍者を除く)の殆どが次年度中国語を再履修しているので、3割近くが中国語への「語学移民」ということになる。表1、表2から明らかなように約7割(1992年度)～約6割(1993年度)の中国語を履修第一志望とする学生のうち約3割が学校サイドの都合(教室の規模、教員の数など)から他の外国語に振り分けられている実情では、ドイツ語I履修生の3割近くが脱落し、中国語へ

表 8

		1990年度	1991年度
履 修 者 数		242	281
前 期	受 験 者	194(80.2%)	256(91.1%)
	合 格 者	124(63.9%)	199(77.7%)
	不 合 格 者	70(36.1%)	57(22.3%)
	不 受 験 者	48(19.8%)	66(23.5%)
後 期	受 験 者	172(71.1%)	215(76.5%)
	合 格 者	116(67.9%)	149(69.3%)
	不 合 格 者	56(32.6%)	66(30.7%)
	不 受 験 者	70(28.9%)	66(23.5%)
年 間 評 価	合 格 者	134(77.9%)	185(86.0%)
	不 合 格 者	39(22.1%)	30(14.0%)
	脱 落 者	69(28.5%)	66(23.4%)

表 9

		1992年度
履 修 者 数		334
前 期	受 験 者	295(88.3%)
	合 格 者	212(71.9%)
	不 合 格 者	83(28.1%)
	不 受 験 者	39(11.7%)
	脱 落 者	39(11.7%)
後 期	受 験 者	230(68.9%)
	合 格 者	129(59.4%)
	不 合 格 者	88(40.6%)
	不 受 験 者	104(31.1%)
	脱 落 者	94(28.1%)
年 間 評 価	合 格 者	206(94.9%)
	不 合 格 者	30(5.1%)
	脱 落 者	94(28.1%)

※1990年度と1991年度については、評価方法が同一なので一つの表にまとめた。

表10

1993年度前期	
履 修 者 数	230
受 験 者	192(83.5%)
合 格 者	148(77.1%)
不 合 格 者	42(22.9%)
不 受 験 者	38(16.5%)
補 習 受 講 者	30
補 習 合 格 者	23
最 終 合 格 者	171(88.6%)
不 合 格 者	19(11.4%)
不 受 験 者 (38名) の 出 席 状 況	
欠 席 回 数	人 数
1～2	3
3～4	6
5回以上	23
全 部	6

の「語学移民」となってもあながち「不自然」とは言えないだろう。

1993年度については、前期のみのデータ(表10)であるが、すでに38名(16.5%)が3回に分けて行なわれた前期試験を1回～3回受験せず、これによって

継続する意志のないことを表明したものとされる。これら38名の受験しなかった学生の出席状況を見ると、一度も出席しなかったのが6名、5回以上欠席した学生が23名、3～4回欠席者が6名もいる。これらの学生の殆どが、授業中教室の後部座席に座り、ドイツ語を習得しようという意欲を全く示さず、適当に私語を楽しみながら「どの程度容易に単位が取れるか」偵察している様子であり、そしてその「難易度」をある程度感知したところで「見切り」をつけ、立ち去ってしまうのである。このような「語学移民」といった問題を解決するには、将来的には、(1)学生の志望を第一とする、(2)一度選択したら他の外国語への乗り換えは禁止し、同一科目を再履修するように義務づける必要があろう。その場合、補習制度なども採り入れていく必要があろう。

1993年度から補習制度を導入したことについては、表7で言及したところであるが、表10で明らかなおり前期合格者が88.6%と大幅に増加したので、次年度の「語学移民」の数はかなり減少するであろう。

(7) 出席と理解度（成績）

外国語を習得するには、とにかく授業に出席し、数多く練習を重ねることが最低限必要である。まして、初学の外国語であればなおさらのことである。次のデータは、出席と理解度（成績）には密接な関連性があることを示すものであり、とりわけ語学教育においては授業への出席が最重要、不可欠であることを物語っている。

表11

1992年度	〈履修者数〉 334					
欠 席 回 数	0	1～2	3～4	5～6	7	8～全欠
学 生 数 (%)	122(36.5)	91(27.2)	28(8.4)	5(1.5)	1(0.3)	87(26.0)
合 格 者 (%)	112(91.8)	73(80.2)	19(67.9)	2(40.0)	1(100)	0
不 合 格 者 (%)	10(8.2)	18(19.8)	9(32.1)	3(60.0)	0	87(100)

※欠席8回以上は、「年間3分の2以上出席しなければならない」という規定に反し、受験資格が認められず、たとえ受験しても評価の対象にならない。

無欠席または欠席回数1～2回の学生は、213名(63.8%)おり、そのうち185

名(86.9%)が合格し、28名(13.1%)が不合格となっている。欠席回数が多くなるにしたがって、合格者よりも不合格者の数が多くなっている。授業に出席することがいかに重要かの証左である。

なお、7回欠席して合格した学生が1名いるが、これは全く稀なことである。当該学生は、「単位が取れば良い」と考え、欠席限度回数を守り、かなり独学し、合格した、もともと「能力」のある学生である。

例年、年度の最初の授業時間では、ドイツ語の授業についてのガイダンスを行ない、ドイツ語の簡単な歴史、英語と対比しての大きな違い、発音、教材・辞書の紹介、そして学生が最も関心を示す評価の基準(出席が重要であることを強調する)について説明する。「何事も始めが肝心」といわれるが、このガイダンスの時間に欠席した学生(32名)の半数(16名)が、1993年度前期不合格となっている。この数字は、ガイダンスの意義を再度考え直す必要性を示しているものであり、また学生にはガイダンスへの出席が重要であることを「講義要項」のなかでも、また新入生合宿のガイダンスでも強調する必要がある。

4 「教育改革」と外国語教育

本学でも、遅ればせながら平成5年度になってようやく組織的に「大綱化」を検討する委員会が両学部を設置され、まずはカリキュラムの改革に着手し、すでに第一次案、第二次案が出されている。法学部のカリキュラム改革案では、語学は、従来の外国語の「第一」「第二」の枠を外し、英語、中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語のなかから一つを選択し、各外国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ(各2単位、合計8単位)の履修を必修としているのにたいして、商学部では英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ(各2単位)を必修、Ⅳ、Ⅴ(各2単位)を選択科目とし、第二外国語については「選択科目」とする案が出されている。現行では、両学部とも第一外国語の英語8単位、第二外国語4単位が必修であることを考えると、大学審議会の答申が「一般教育の重要性」を強調しているのに反して「軽視」の方向をたどっているようである。

改革の議論のなかには、「第二外国語をやったが、何にも覚えていない、だか

ら必要ない」といった発言もあった。大学における一般教育としての語学教育の目標は、コミュニケーション重視の授業であれ、「訳読」中心の授業であれ、その目指すところは「異文化体験」にあり、「異文化」との接触により、「異文化」を理解し、そのことにより自国文化を知ることにある、と考える。「会話力」の習得が、「異文化体験」を可能にする一つの手段であることは否定しない。しかし、「一般教育」科目のなかの語学教育の到達目標を、単に「会話力」の習得のみに限定するのは、「実用性」だけを追求するきわめて近視眼的な見方である。「会話力」の習得のみを考えるなら、大学よりも優れた教育機関がちまたにある。本学のおかれている語学教育環境については上述したところであるが、70～100名の学生を前にしたら、いかに工夫を試みたとしても「会話力」の習得は不可能といっても過言ではない。「不可能」だったら「第二外国語は要らない」という短絡的な結論も見られる。学生の授業の到達目標は、1993年調査では「読めるようになりたい」(36.4%)、「話せるようになりたい」(29.6%)、「その国の文化を知りたい」(22.7%)にある。これらの三つの目標を実現するには、何はともあれ教育現場の改善が必要である。

第一に、教育設備(視聴覚機器など)の整備である。第二に、新たな教授法の研究、授業の工夫などである。本学では、これまで各外国語の壁を越えた教授法の研究会や他人の授業の観察といった異なる外国語を担当する教員間の経験交流が全く行なわれてこなかった。学外の教授法研究会へ積極的に参加することは言うまでもないことであるが、学内でも異なる外国語担当教員間で始めることを提案したい。第三に、授業の成果を客観的に評価するために各外国語の「検定試験」を利用する⁽⁷⁾。第四に、「その国の文化を知りたい」という学生の欲求に応えるためには、その国についての教員の幅広い知識が必要不可欠となり、常にアクチュアルな問題に目を向けていなければならない。そのためには、現行の長期(1年)、短期(3カ月)の海外研修以外に、語学教員が少なくとも2～3年に一度は3週間から1カ月程度滞在して、その国の最近の事情を吸収できるような短期の海外研修制度を設けるべきであろう。

現在、提案されている法学部の一つの外国語を必修選択(8単位)とする案が実現した場合、本学の学生は一体どの外国語を選択するであろうか。法学部

の案と同じ選択方式をとっている千葉工業大学の第二部の場合、外国語は1990年度から英語、ドイツ語、中国語の中から一つ選択となっており、入学者の40%がドイツ語、中国語を選択しているという報告がなされている。⁽⁸⁾「1993年調査」では、「高校時代、英語は得意科目でしたか」という設問に、得意5.9%、普通42.3%、苦手49.5%と回答している。本学でも、恐らく半数以上の学生が英語を選択することになるであろう。残りの学生を、英語以外の外国語で分け合うことになり、恐らくドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語では理想に近い小人数の授業が実現するのではないだろうか。現行の中国語を志望しながら他の外国語に振り分けられるということもなくなり、自ら志望した、選択した外国語の学習が可能となり、その結果、現在と比べて学習意欲・姿勢に顕著な違いが出てくるであろう。大半が英語を履修してしまい、履修学生が少なくなるといった不安はあるが、反面、小人数の学習意欲にあふれた学生を相手に教育ができるというメリットも考えられる。

受験生の数の急激な減少の時代が真近に迫っている。私学の「冬の時代」「自然淘汰の時代」とも言われている。大学設置基準の大綱化は、大学が教育改革に成功し、生き残れるか、それとも「自然淘汰」されるのか、大学自身の「企業努力」にまかせるものである。「甘えの構造」とか「閉鎖的」とか「ぬるま湯的」体質とか指摘されている大学の組織と教員の意識の大改革が求められている。

本学における教育改革が目途としていた次年度からの実施は困難である。なぜなら、もっと熱心な議論が展開される必要があり、また実施に移す準備時間が必要だからである。しかし、本学の教育改革が何時から始まるかに関係なく、各教員の教育現場では、常に新たな教育方法の開発、工夫が試みられなければならないのである。

〔註〕

- (1) 喜多村和之「大学の自己点検・評価と Self-study」民主教育協会誌『現代の高等教育』No. 330 (1991年12月号), p. 60.
- (2) 『私学時代』1993年7月号, p. 12.

- (3) 前掲書, p. 12.

例えば、『一般教育学会誌』第15巻第1号(1993年5月)には、全国の大学から自己評価について多数の現状報告がなされている。

- (4) 大学審議会組織運営部会の「中間報告」,(1993年5月)。

- (5) 益田良子「学生による授業評価の試み(Ⅰ)ー心理学の場合ー」『中央学院大学教養論叢』第6号第1号, p. 84.

- (6) 日本独文学会ドイツ語教育部会アンケート委員会編「ドイツ語教育に関する調査報告」(1991年12月実施), p. 23.

回答者の約4割が「終了しない」と回答している。なお、「終了する」(51%), 「終了, 次のものに進む」(8.6%)学校もある。

- (7) 第一回の「ドイツ語技能検定試験(独検)」は、1992年に行なわれ、9000名が受験した。本学でも、法学部の学生一名が3級と4級に挑戦し、4級に合格した。

- (8) 近藤弘「大学設置基準の改定と外国語教育ードイツ語教育の立場からー」『千葉工業大学研究報告・人文編』第30号(1993), p. 24.

- (8) 近藤弘「大学設置基準の改定と外国語教育ードイツ語教育の立場からー」『千葉工業大学研究報告・人文編』第30号(1993), p. 24.